

都会の人たち～私たちの生活(二)

六、学校給食

それでは、学校給食は、日本じゅうどこの小学校でも行われているかということ、まだそうではありません。まず、さいしょに全国のすべての市の小学校で行われ、だんだんに町や村の学校でも行われるようになるそうです。まず都市のような食糧の困りかたのはげしいところから行われたわけです。外国でも学校給食はもっと以前から大規模に行われていて、政府が多額の費用を出しているところも多いそうです。くわしいことは先生がたもよくごぞんじないので、わかったらまた教えてくださるといわれました。

学校給食の材料は、ずいぶんほうぼうからきています。脱脂粉乳やジュースのようにはるばる海を越えてくるものもあります。今は全世界が食糧に困っていますが、少しでも楽な國の人たちは、自分たちの分をへらしてまで外国に送っているのです。「自分たちだけたくさんたべても、他の國の人々が食べられないで困っているのを見てはうれしくない。」と考えているからだとききました。政府や都道府県から給食用に配給されるもの、市役所や学校で集めるものもあります。

給食用の燃料は今でもまきがおもなものです、これもずいぶん遠くからはこばれてきます。これも思うように手にはいらないので困っている学校が多いのですが、私たちの学校では、製材工場からおがくずをゆずってもらっている、どうにかつこうがつくそうです。

どんな材料をどれだけ使って、どのような料理をつくるかということは、これまで小林先生と松本先生と調理係の山田さんの三人が、相談してきめていましたが、これからは、両親と先生の会の給食部の委員長も参加してきめるそうです。現在もおもな材料は脱脂粉乳・魚・野菜・ジュースで、これにいろいろほかの材料をくわえて、週四回以上、あたたかい副食物を給食するきまりになっており、その副食物は、ひとりあたり一回一八〇カロリー以上で、タンパク質一五グラムをふくむようにしているのだそうです。私たちの学校では、火・水・金・土の四回、副食物を給食してくださいます。こんだて表には、そのたびごとのカロリーが記入してありました。うしの骨やぶたの骨を使うと、カロリーがそうとうふえることや、バターを入れるとカロリーがぐんとふえることなどがわかりました。

街頭録音

きのう午後、駅のそばで街頭録音があったので、敬一さんと見に行った。小さなあき地に、人が二、三百人集まっていた。となりのビル二階に録音する機械がすえつけてある。ここでは録音するだけでなく、発言する人の声が、集まっている人たちによくきこえるようなくふうがしてある。

あき地には、スピーカーが四つ五つあって、話している人の姿は見えなくても、声はよくきこえる。あき地のまんなかに低い台があって、その上に、放送局の人が三人立っていた。黒い野球ぼうをかぶり、街頭録音班という腕章をつけている。そのなかのひとりが、長いコードのついたマイクロフォンを、話す人の口のそばにあてがい、アナウンサーが話を進めている。

ぼくたちがいったときは、もうはじまっていたので、人のうしろの方になってしまって、話している人の顔がみえなかった。だんだん人をおしわけてなかにはいっていってみると、話したいという人が、台のちかくにならんでいた。集まった人たちの意見に対して、政府の考え方や、仕事を説明するために、戦災復興院の人もみえている。この人はなかおれをかぶり、レインコートをきていて、少しふとってはいるが、やさしい声の人だった。気がついてみると、集まっている人たちは、老人も若い人も、男も女もあり、服装もさまざまだが、大学生がたくさんいた。また敬一さんのような中学の生徒もかなりいた。小学生は、ふたりばかりへいの上にのぼってみているのがいただけだった。

はじめ、家をたてるにはどうしたらよいか、ということを中心に、おもいおもいの意見が出た。資金をどうするか、資材をどうするか、土地をどうするか、というようなことが問題になった。家の焼けない人から、税金をとったらどうか、という人もあり、家は焼けなくても、商売のなりたたない人もあると、それに反対する人もあり、三角くじや宝くじのように、家のあたるくじをつくったらどうか、というえかきらしい人の話もあった。家は、あたらないけれど、その家をつくる資金のあたるくじは、都道府県で実施してもよいことになっていると、復興院の人が答えた。

しかし、結局は、政府の手で安くてよい住宅、ことにアパート式の共同住宅をたててほしいという希望や、大邸宅やあいている建物をもっと開放するのがよい、という意見が強かった。長いひげのおじいさんが、木や竹を少し使って、土で家をつくったらよいのだといったが、少しこっけいなおじいさんで、きいている人はおとぎ話のようだ、と笑った。ぼくは、おじいさんの考えを研究してみたらどうかと思った

．．．．．

都市の気分

月 日

道 男

ゆうべはあちこちにたつた年の市のことから昔ばなしに花がさき、東京・京都・大阪をはじめとし、全国各所の都市の気分について、おとうさんたちが話しあわれた。ぼくたちは、きき役だったが、たいそうおもしろかった。

「おじさんが、はじめて東京にでたときは、山の手にも、下町にも、江戸のなごりがたくさんあった。山の手にはところどころまだ昔の武家屋敷も残っていて、そこに住んでいる人には、やはりじょうひんな、もの静かなところがあった。下町の店には、のれんをかけた紙屋とか呉服屋、油屋などがならび。そば屋や、うなぎ屋の店のようすも、なんとなくふるめかしくておもしろかった。

そのころはまだ百貨店というものはなく、今の百貨店はみな呉服店だった。呉服店といっても大きな二階建てで、げそくで、はきものをかえて、店内をよくまわったもので、呉服のほかにも、いろいろな商品売っていたし、休憩室や子供のあそぶへやのあるものなどもあった。そのほかに勧工場といって、たくさんのお店があつまって、いろいろな品物売っているところがあった。これが今の百貨店のようなものだった。一方の入口からはいって、両側のみせをみながらだんだんすすんでいくと、上の方へあがり、結局別の出口へ出てしまうというわけで、今の百貨店とはちがって、ちょっと博覧会の会場のようなだった。おじさんは、よく上野の勧工場（博品館とよばれていた）を散歩したものだ。

下町では人間のいせいがよく、動作もきびきびしていた。お祭りのときや年の市のときなど、町じゅうに活気がみちあふれていたものだ。

よく神田明神の年の市にいったが、今の露天よりもずっと大きな小屋がけがいくつもできていて、きれいな羽子板が何十、何百とならべてあったことをおぼえている。

正月のおかざり売る小屋も大きなものだった。みせものも出たし、露天商人も何町というほど店をならべ。て、そのあいまいまいに、がまの油うりなんかも出ていた。

電燈やアセチレン燈は、まひるのようだし、あちこちでたき火はしているし、商人は商人で、おもしろおかしく、お客をひきよせ、品物売ろうとするし、なんともいきおいのよいものだった。寒い夜風のなかだのに、たくさんの人が店をひやかして、楽しそうに歩いている。なるほどこれがいせいをきそう江戸の気分かとすつかり感心したこともあったが、おかげでゆだんをして、すり

にさいふをとられるという大失敗もやった。

江戸っ子の気分は、下町にいったみちをきいたときによくわかった。ことばはあらっぽいけれど、あっさりしていて、だれにむかっても同じような気持で、要領よく教えてくれる。さすがにこれは江戸っ子だと思つた。このごろ下町にいったみると、震災や戦災でようすがすっかりかわっていて、さびしい気がする。

しかし、私は、東京には、また何か新しい気分が生まれてきているように思う。電車のなかなどは、人間のかざりけのない心持がそのままあらわれるものだが、みんなで助けあい、もりたてていこうという気分がたしかにわいてきている。今の都会の生活では、おたがいに名まえも知らないから何をしてにもかまわないという気楽さがあるので、とにかく無責任になりがちなものだ。東京にもそういうところは大いにあるだろうが、一面、知らないものどうしでも、おたがいに心をうちあけてつきあうという大きな気持を育てられてくるのではないかと思う。」

おとうさんの大阪の町の気分についての話や、京都や奈良のお祭のことや、書いておくほうがよいことは、ありすぎるほどだが、ぼくのいちばん感じたおじさんの話だけ書いた。おじさんのいう東京の町の新しい気分というようなものを、ぼくはこのまえの街頭録音のときに感じた。